

「新たな都立中央図書館整備に係る有識者会議」（第4回）議事要旨

日 時：令和8年3月6日（金） 16時00分～18時00分

場 所：都庁第二本庁舎 16階教育委員会室（オンライン併用）

出席者：吉見委員（座長）、朝日委員、遠藤委員、小林委員、田中元子委員、

田中里沙委員、中井委員、中島委員、中野委員、野末委員

（欠席：木村委員）

議事概要

- 委員紹介
- 事務局から、資料に基づき以下について説明
 - （1）将来像に基づき提供するサービスや設備
 - （2）基本方針案の構成について
- 意見交換

【吉見俊哉座長】

- 令和5年度の有識者会議から引き続いて、東京都は新たな図書館のコンセプトを Library for Creation と既に宣言している。我々の課題は、その Library for Creation、創造・交流図書館とは一体何かという具体像を示すことだと理解している。
- その柱として4つが示され、最初の「世界都市東京の『知の広場』」は「広げる」、2番目の「知を広げ、学びを深める図書館」は「深める」、3番目の「自然と調和して～」は「居心地」、最後の「誰もが～」は前から出ているように誰一人取り残さない、「誰もが」は every one であり、そこに力点があると理解している。四つの柱が組み合わせる形をここで考えようというのが全体の主軸になる。
- 委員の先生方から、この資料を見て、お気づきになったことがあるか。

【野末俊比古委員】

- 「Library for Creation と図書館像との関係について」の骨格の下のところは、今のことが書いてある。その従来の強みの前に、図書館としての基本的な機能があって、都道府県立図書館としての役割を果たすという、図書館として今きちんとやっていることは堅持する、あるいは充実することを、さらにもう一つ下の層に付け加えていただくと、図書館社会の皆さんが安心する。これだけ見ると新しいものになってしまうのかと思ってしまう。この従来の強みのさらに下に、図書館としての、基本的・基盤的な機能の、さらなる拡充のようなものがあるということ。ぜひうまく入れていただくと、とても良い。
- 従来の強みのところに江戸東京の貴重資料があるが、都立の強みの一番はあらゆるジャンルの調査研究にきちんと対応しているところ。だから実際に都立中央図書館に来る方は

高度な調べ物をする。その調査研究に広く対応することを加えるとさらに良い。

- 都立図書館には、図書館協議会という図書館法に基づく協議会があり、一体となって運営をしている。どこかに図書館協議会を入れると、広く都民の意見を聞きながらやっていることも分かって良い。
- 「自然と調和した緑と水の～」は、そこだけ特別な空間で閉じられている感じがする。都会の中で自然と緑の中に入っていき、大都会との連続性、都心のど真ん中にある意味をこの説明のどこかに少し匂わせると良い。
- 「活動エリア」は、結局来館する人はいいが、来館できない方々もたくさんいて、島しょ、多摩、あるいは体の不自由な方等、様々なケースがある。それでも、ある程度、活用、体験、活動ができることを欄外かどこかに匂わせると良い。例えば資料だと配送できるし、もちろんデジタルも使うけれど、デジタルサービスだけではない。図書館の場合、全域サービスという言い方をするが、全域、全都民に対してもちゃんと考えると、1行下に付け加えるといい。
- 四つのエリアは個別に存在するのではなく、重なるところが大いにある。例えば、創造・発信のところで新しい東京の文化のようなものが作られて、一番上の「知の広場」で発信していくところにつながる等。そのつながりや重なりが相互に関連し合いながら、このエリアが作られていくことも匂わせていくといい。

【中野泰志委員】

- 私たちの役割は、図書館の要件に対してアイデアを出すまでであるという理解でよいか？それに基づいて仕様書が決められ、その仕様書に基づいて業者が選定されて、まちづくり全体の中で、選定された業者がこれを実現していくと思うが、その後のプロセスにはかわらないということか？
- 全体を通して、「誰もが」という言葉の中に、障害のある人たちや高齢者のことを含めると説明があったが、単に国が定めるガイドラインの標準的なことをクリアしていれば良いという話で終わりにするのか、本当に誰もがアクセスするのが重要。まちづくりは別な形で提案されると思うが、図書館という機能を考えたとき、色々な方々が様々な方法でアクセスできないといけない。その意味では、もっと障害者や高齢者のことを強調しないと、業者はアクセシビリティをどこまで確保すれば良いのか、分かりにくいのではないか。そもそも誰一人取り残さないというならば、最初の段階で、誰もが物理的にアクセスできる、書籍等の情報にアクセスできることについて書き込んでおく必要があるのではないか。
- 民間の活用は非常に重要だが、同時に外部委託、特に指定管理をする場合、注意が必要。例えば指定管理の期間を何年として考えるかによって、障害のある人や高齢者のアク

セシビリティが確保できるかどうかには大きな違いが出てくる。指定管理は競争的に入札するため、経費は安くできるが、3年や5年で契約を切られてしまうと、余程しっかりとした基盤を持つ事業者でないと手を挙げられないはず。様々な図書館等の運営で、指定管理が活動を制限している場合があって、民間に委託する際にはその点もしっかりと考えないといけないのではないか。

- 外部委託の場合、そこに全部お任せするのか、指定管理かによって違いが出る。今後の議論かと思うが、サービスを安定的に提供していくためには、民間を利用する際に、民間が安定的に、例えばアクセシビリティを実現し続けられるような力を持っていることを、仕様の中に明確に書き込んでいく必要がある。

【吉見俊哉座長】

- 指定管理者はかなり大きな問題を含んでいて、国でも議論をしているけれども、指定管理者制度ができてから十数年経って、良い面とマイナスな面がはっきりしてきているというのが現在の段階。図書館に限らず劇場、音楽堂、博物館、美術館も同じだが、例えば人材育成というか、責任を持って運営をする人を長期的にどう育てるかという問題がある。自治体はその面で弱まってはいけない。長期的な視点をどうするかという問題は、これからの会議体といずれ重なる話だと思う。

【田中元子委員】

- Library for Creation という言葉を外に出した時に、クリエイションとは何か、ここではクリエイションというものをどのように考えているか、ちゃんと答えられないといけない。よくあるスローガンになってほしくない。クリエイションを中心に据えるならば、東京都として、今回の図書館プロジェクトとして、深く議論して言語化できるようにならないといけない。他のポイントも具体的に書かれてはいるが、名詞が多い。なぜそれが良いのか、どのような東京都の将来像を目指して、どのような人々の生活や知との関係を目指しているのか、自分の言葉で話せなきゃいけない。この名詞や動詞をこれからプロジェクトに関わる様々な方と共有していくとき、その言葉の裏側にあるものまで共有できないと、齟齬が起きる恐れがある。有識者会議でそういうことをもっと話したかったし、これからチャンスがあればぜひお願いしたい。
- クリエーションだけではなく、自然と触れ合えるような空間を作ることも書いてあって素敵だが、図書館にとってなぜ良いかわからない。誰も取り残さないことって良いことでしょう、クリエイションって良いことでしょう、未来って良いことでしょう、という前提で進めていくのはプロジェクトとして危険な場面が来ると思う。一つ一つ、誰でも意味を知っている単純なワードについて、深掘りできると良い。

【吉見俊哉座長】

- 全く同感。クリエイションと言う時に危険なのは、多くの業者が関わり、都合のいいように解釈されることだ。
- この場でこれまで議論してきた話で言えば、やはり本はクリエイティブである。本は創造を内在させている。前に AI の話が出たが、我々が考えるような意味では AI は全くクリエイティブではない。本を読むこと、読書すること、創造性に立ち戻ると、実は Library for Creation だけでも、ライブラリーとクリエイションの間には少しバトルがある。この場では理解されていると思うが、一般の社会全体に理解してもらえる形にするにはどうしたら良いかという問題はまだ残っているように思う。

【田中里沙委員】

- ここにたどり着くべく、これまで議論を深めてきたなという感覚を持つし、それぞれのアイデアが研ぎ澄まされて、輪郭をまとめていただいたと感じる。このコンセプトの真意や心を大切に進める必要があるので、改めてこの Library for Creation がこれからどんな価値を社会にもたらしていくのか、その価値を住民も関係者もどう実感していくか、敏感になって動いていければ良い。歴史はこれから始まるので、担い手としての誇りとか自覚とか、当事者意識をあらゆる人が高められるような環境づくりが大切かなと思う。創造と交流がキーワードなので、図書館の空間の中の自分、本との距離が意識できるような建物や場であること。図書館に来れば、図書館にアクセスすれば、思考が柔軟になって、視点が多層化して、チャレンジ精神が湧き出てきて、誰もが何者かになれそうとか何者かに変容していけそうという感覚になれるのが幸福感だと思うし、ウェルビーイング、プラネタリーヘルスにもなっていく。これから建築、建設、運営に当たる人たちにバトンタッチされると、このコンセプトを常に意識し、強くイメージしてもらうことが、正否を分ける。言う方は簡単だが、常にチェックして忘れないようにお願いしたい。
- 施設はこれらのコンセプトが外にも湧き出るようなアイコンになってほしいし、企画やイベントの情報がライブに、同時進行的に出て行く必要がある。例えば天気予報を見るように、図書館の今日明日の動きをいつもチェックしてもらえるような存在になることを志して、情報発信をしていった方がいい。そうすると、都民からも、全国、海外からも東京の現時点がわかる。東京の現時点を常にみんなが追いかけて、それが歴史を作る、関わる人が担い手にもなっていくと思う。この資料は、それを十分に発信できる内容になると思うので、次の段階に申し送り、また循環させていくことができればいい。理解者を増やしていくことが大事。

【中島さち子委員】

- 東京都の中央図書館はある種のモデルというか、リーダーになると思う。他の図書館や世界との連携という要素が入ってくると良い。科学館や図書館のあり方が変わっている中で、図書館としてこうあるべきというものを出していただけると良い。祭り for Creation みたいな、イベント的なことをやるのも良い。
- 「学校で」とどこかで書いていただけると良い。今、学校は創造するようなところに大きく変わりつつあるので、探究、プロジェクトをここでやることもあるだろう。企業もあるかもしれないが、まず学校。明示的に、例えば病院の子供たちや福祉施設の子供たちと積極的にやるとか、分断しがちなところがここでいろんな立場で多様な人たちが関わられるという発信になるような連携、イベント等を考えていただけると良い。
- 「知る」と「創る」ことが循環する、知の躍動みたいな、知ることそのものが創造的であるという文脈が出て良いのかもしれない。クリエイションという言葉の持つ響きは、人によってイメージが違うので丁寧に書いた方が良さそう。
- 「人文知」が今すごく大事になっている。いわゆる文系・理系の乖離も課題になっている中で、人文知と科学や数学など重なり合うことで生まれてくる未来も、どこかに言及があっても良い。

【事務局】

- 海外との連携は、今の中央図書館では近くにある大使館と連携した企画展示等を実施している。昨年度はエジプトのアレクサンドリア図書館と協定を結んだ。新図書館ができるまで時間があるので、海外との繋がりを今から紡いでいき、海外を感じられるような形に進めてまいりたい。
- 学校との連携は、今も校外学習の場として、調べ学習などで司書から調べ方のレクチャーなどもしている。さらに来年度から、来館しなければ見られない中央図書館の電子書籍を学校からでも見られるようにする取組など、試行的に始める。そういった総合的な学習や探究学習等も含めて、教育現場を下支えする部分で図書館の役割として進めていくことも考えなければいけない。

【吉見俊哉座長】

- 海外の図書館はもっと広がりを持っていて、代表例で言えば、ニューヨーク公共図書館やボストン公共図書館があって、ニューヨークに関しては高度な研究から、公衆的なところまで相当いろんな活動をしている。世界中、特に欧米の図書館には蓄積があるから、そこどう連携体制を築くかという問題はちょっと大きい。
- 学校や病院との連携とともに、東京都は劇場、音楽堂、博物館、美術館、いろいろ持つ

ている。生活文化局の所管になるが、それらの施設との連携も同じ文化施設として出てくるのではないか。

【中井孝幸委員】

- クリエーションに関しては、まさにそれが図書館界で言われている課題解決に当たると思う。学術的な論文から、日々の新しくやりたいことまで、資料からヒントをもらうことが課題解決に当たるという意味では、ちゃんと対応できるのではないか。
- 学校図書館との連携は、都立多摩図書館もあり、いろんな施設や学校と、今回の中央図書館を位置づけてどうするか検討が必要。多摩と中央で分かれ、資料も分けられたままでいいが、中央図書館に児童書を全く置かないのは、多分だめだろうと思った。
- 児童書の扱いにもよるが、想定される利用者層、利用のイメージをたくさん書きだし、想定される利用を考える必要がある。一般的な普通の市町村立図書館は、家族連れと個人で来るのは大体 50%、50%。でも家族連れの人たちは借りたらすぐ帰るパターンで、一人で来て勉強する人たちの滞在時間が長い。一方、大学図書館は 8 割が一人で来る。ワイワイやっているラーニングcommonsも 7 割ぐらいは一人で来た人たちが座っている。シーンとしたところをグループで使う人たちもいる。音の環境、音のゾーニングをちゃんとしながら、静かな場所と賑やかな場所、いろんな場所を計画してほしい。石川県立の主題テーマ別配架でビブリオバウムの真ん中に 7 万冊、開架に 23 万冊あって、トータルで 30 万冊。残りの 70 万冊が全部地下の閉架書庫に眠っている。今回 200 万冊、将来的に 300 万冊までいくとなった時、開架のボリューム感は単純に倍ではない。新鮮な資料をずっと開架で 30 万冊維持し続けることはすごく大切な、大変なことだと思う。ほとんどが閉架書庫になった時、せっかくの資料がほぼ眠ってしまう可能性があるので、今後の空間の作り方にもよるが、膨大な知があることを感じられるような建築の話を考えていただいてもいいかと思う。
- 石川県立って駅から相当離れている。みんな車か、旅行者はタクシーやバスで 30 分近くかけて行く。駅に近い立地だと、いろんな人たちが入ってくる可能性がある。北欧の図書館も見たが、デンマークのブラックダイヤモンドでは観光客が多すぎて、写真を撮りまくるので入るなと言われていた。福岡県で痛ましい事件もあった。BDS やゲートはあると思うが、それ以外は自由に出入りしても良いだろう。そのあたりの人のよけというか、あるいは受け入れられるほどの、受け皿がちゃんといるなっていうふうに、それは屋外でも屋内でも考えていただいて良いかなと思った。

【吉見俊哉座長】

- 音のゾーニングの話、開架と閉架の関係の話、これまで議論してこなかったがセキュリ

ティの話は、三つとも中核的な問題。

【事務局】

- 現在、開架は大体 35 万冊で、大半が閉架書庫。開架は充実させつつ、閉架をどう活用していくかは大きな課題と認識している。現在もバックヤードツアーで閉架書庫に入れる企画は人気がある。そこも含めて、建築の部分の作りやソフト面は引き続き考えていかなければいけない。
- 人が来てほしい一方で来すぎると、という話をご指摘の通り。ゾーニングして静かな空間と賑やかな空間を分けることを考えながらも、想定以上に来る可能性は十分あるので、施設の作り方で変えていくのか、ルールの中で決めていくのか、今後検討しなければいけない。

【吉見俊哉座長】

- 中井先生に聞きたいが、音のゾーニングにしても、開架と閉架の関係にしても、建築的には相当チャレンジングなテーマ。大規模な図書館でこれを実験するって、建築家としてはやってみたいのか。ここから外側で、ここから内側にしたら解決不能。その中間の領域、敷居やバッファゾーンをどうデザインしていくのか。

【中井孝幸委員】

- 開架と閉架、どちらかにしないと解がないが、きっと中間的な部分のデザインの話になる。セキュリティも、ここから内側は絶対入っちゃダメと言ったら成り立たないが、ここまではいいけれども、ここは遠慮してくださいみたいな感じで、バッファゾーンをどうデザインするかということだと思う。バッファゾーンの考え方を、音なり、行為、行動、利用のされ方なり、資料の配架も含めて行うデザインに解がある。これは建築家にとってはかなり面白い。建築家は皆さんやりたいのでは。

【朝日ちさと委員】

- クリエーションの問題提起があったが、この資料で伝えようと思った時に難しいと思う。現在進行形で変わっていくものだが、そのこと自体をどこかで入れておく必要があるのではないか。
- 本と出会った時に生まれてくるものについて、デジタルとの関係で言うと、受け手側の知識との向き合い方がどんどん変わってきている。学生もスマホを持った状態で物理的な本と出合った時にどう変わっていくのか、分かっていないこともいっぱいあるので、クリエイション自体について考えていくことが必要。事業者との関係の考え方も思ったが、

まちづくりと公共施設をコンサルやゼネコンは今までいろいろやってきて、官民と言う中で、まちづくりで求められている空間とか、人を呼ぶとか賑わいとか、そういうものはイメージを持っていると思う。ただ、クリエイションみたいなところを理解してもらうのはすごく大変。

- 空間として、図書館という知の空間は、表に出さなくてもそれだけで重みが出てくるような影響ってある。それを理解してもらえようなやり方、クリエイション自体と一緒に理解するプロセスが大事。これをやってくださいではなく、官民連携の取組みをどうするか、やっていく中で一緒に考えていくというプロセスを取ったらいいかなど。
- 言葉ばかりではなく、ストーリーとして伝えることが必要ではないか。先ほど利用者がどういう人かというお話もあったが、担い手と司書の中でもいろんな機能を持つ人がいるし、中間的な役割を果たす方もいると思うので、その担い手と利用者像をストーリー的にナラティブに伝えていく工夫は必要ではないか。
- 将来像の順番にはどういう意味があるのか。1番目が位置性、場所性で、3番目が都会の中でのオープンな場所といった地域性という感じかと思うが、2番目と4番目が知の活動的なものなので、これが離れているというのはどういう理由なのか。
- 休憩できる都会の中のオアシスで創造にも触れられる、居心地いい感じになっているけど、グリーンインフラに関わるところが割とある。生態系が知の創造に与える影響も明らかになっていない、難しい部分だと思う。自然と調和した空間と創造性の関係、クリエイティブに自然が与える影響が必ずあるし、発揮させたい部分なので、居心地いいだけでなく、クリエイティブに結びつけて書いてほしい。

【吉見俊哉座長】

- まさしく自然そのものが書物だと私は思う。だから自然と触れることと、書物を読むことは限りなく近いと感じる。どういうふうに表示するか、クリエイションということを答えられる形にしていくことが一丁目一番地である。
- 中井委員がおっしゃったセキュリティの話や、開架と閉架の話、それから中野委員がおっしゃった指定管理者制度の問題とか、今の段階では先のテーマかもしれない。いくつかの段階的な連続性というかシーケンスがあるような気がする。

【遠藤新委員】

- 恐らく今後プロポに出していくとき、将来像の四つの柱が提案評価の軸になる。3番目の自然と調和した水と緑の憩いの図書館が、他と比べて具体的で即物的すぎて、クリエイティブな提案が出てこない印象がある。広がり欠ける表現になっているのが惜しい。自然に対することによってクリエイションが生まれるのはいいけれども、可変的柔軟性がある

るところがクリエイションをもたらす部分が将来像の文言には表現しきれてない。この二つの話を含めるのであれば、「水と緑」を削った方がいい気がする。例えば余白とか柔軟性の言葉を拾って、自然と調和した憩いと余白の図書館という方が合っているのかもしれない。余白がバッファゾーンの話にもつながるし、何がクリエイションをもたらすのか、自然の話以外も書いてあるので、そこも包含した表現の方がふさわしいのではないか。

【吉見俊哉座長】

- 委員によってクリエイションの中身の捉え方が微妙に違う気がする。資料の具体的な文言、書き方のご提案を議論したい。

【田中元子委員】

- 琵琶池とか、あの豊かな自然に対して背を向けずに生かしておこうよと言いたいのだと思う。どこかから緑をたくさん持ってきて、森を捏造する話ではない。この場所だからこそその地形的文脈、自然を生かすことが強調されたら、何がしたいのか、なぜこの話が出てくるのか、グリーンがなぜクリエイティブにいいのか、東京都はどうしてそれを良いと思ってるのか、まだまだ話せることがあるだろう。次に携わる方に、なぜこんなことを考えているのか、今までの議論を全部聞いてほしいぐらい。
- まちづくり方針のリングの絵で、7個のうちの1つが創造・交流図書館機能。きっと他の6個も準備を進められていると思う。この機能、施設について、お互い交流できた方がいい。例えば劇場機能と連動した展示といったように、連動活動が起きやすくなるためには、準備段階でリングが一つになる、ちゃんと繋がるような活動もあったら。たくさん対話をした方がいい。

【事務局】

- 神宮前五丁目のまちづくりは、まさに図書館単独で事業をするのではなく、劇場や国連大学、女性活躍等、全部ひっくるめて、民間事業者にある程度の前提条件を示しながら提案してもらおう形になる。クリエイションと同じように、事業予定者が決まりましたら、まずは智の創造拠点も含めて理念を共有化する作業もしなくてはいけない。全体像について都側は何を考えているのかを示さないと、事業者が決まってから煮詰めていくのでは反発が起きる可能性もあるので、早めにたくさん話していけたら。
- ここでご指摘いただいたものは、まちづくり側も重く受け止めなければいけない。やりたいことは書いてあるかもしれないけど、なぜそれを求めるのか、その考え方をしっかり伝えなければ、事業者とのキャッチボールなり、良い提案を求められない。御意見いただ

きながら深めていきたい。

【吉見俊哉座長】

- どうしてもパワポのスライド形式そのものが不十分。壁いっぱい Library for Creation について、色々な人が色々なことを考えて、この概念をどう組み立てるかをみんな書き込んでいく作業が必要。バーっと書き込んで、その中で議論を深めていくワークショップ的な作業。報告書のような形は良い面もあって、一つ概念をきちんと説明していく、論理的に文章にすると穴がよく見える。報告書として文章化したもので作った方が良いのではないかと。クリエイションの概念も規定されて、我々はこう考えますと言葉で説明できる。みんな大きなポスターを作っていく作業と、誰かが責任を持って文章をまとめていく作業、両方が必要じゃないか。

【小林真理委員】

- 基本的に、資料に異論があるわけではなくて、既に自分が言いたいことは全て皆さまが言うてくださった。文章化の必要性はあるように感じる。一般的に外に出していくにあたり特別な思いを込めるのであれば、文章できちんと書いておく必要がある。
- 神宮五丁目地区のまちづくりの方で関わってきたから、図書館がある意味でコアになって、他の機能と一緒にまちづくりをクリエイションしていくと考えていたので、それほど違和感なく思っていた。様々なクリエイションの考え方があるのだと知り驚いたので、そこは明確にする必要があるのではないかと改めて思った。これまでの図書館のあり方を大事にして、さらに新たなことをやっていくところがクリエイションの分だと思う。それがスライドの前の方にあると良いのではないかと。
- 図書館は専門的な機関で色々なことを解決しようと努力をされてきて、職員の方々も専門性が高い。こういう機関は内向きになってしまうところがあると思うが、今回のまちづくりは他の施設との連携が大事になってくる。そうすると、図書館の職員のあり方も変わっていかねばならない部分が結構ある。今までのものを蔑ろにするのではなく、さらに拡充させながら、組織のあり方とか職員の意識を構築していくことは考えておく必要がある。
- 他の文化施設との連携によって、クリエイションが強化されていくというのはある。今後これまでにあまり連携してこなかった施設と結びついていくことを考えた時、どういうあり方が必要なのかは考えていく必要がある。
- 自然との調和は、無理やり何かを持ってきて、自然と調和して、憩いの場を作ってくださいという話ではないと思う。はっきりと、今残っている木々だとか琵琶池を生かして、どう図書館と結びつけるのかという書きの方が、都としてやってほしいことが明確にな

る気がした。

【吉見俊哉座長】

- これまでの図書館とどう変わるのか、明確に具体的に示すというメッセージ性が必要だということも重要なポイントだ。他の文化施設との関係で言うと、全国的に見ると、この図書館がどういう形になるかの意味は大きい。別のところで議論している話だが、今、全国に博物館、美術館がだいたい1300。それから劇場、音楽堂がだいたい1800。それで図書館が3000から4000の間。ただ、1980年代から90年代に建てられたものが多く、その70%ぐらいが、2040年代までに老朽化で施設の建直しや改修が必要になってくる。
- ところが今の日本の経済力では、どうしようもなくなってしまう状況にある。そうすると、文化的な施設としてどうリバイタライズしていくのか、そこでどういうふうに横軸でコラボレートしていくのかが喫緊の課題になる。逆に図書館側から言えば、新しい図書館の形をきちんと提案することができれば、逆に劇場、音楽堂の側から、博物館、美術館の側から、別の形の提案が出てきて繋がってくると、新しい動きが始まるのではないか。
- 琵琶池の水が渋谷川に流れていって、渋谷川は宇田川と合流して、渋谷という町を作っていくわけだから、誇張して言えば、琵琶池は渋谷という都市の源流みたいなものであり、渋谷という都市を最もよく表す地形でもある。唯一的で特徴的だけれども、普遍的でもあるというか。渋谷区のかかなりの領域の地形とか自然に共通するものを持っているので、この唯一性をちゃんと伝えることが、必ずしも「自然と調和した緑と水の憩いの図書館」という言葉ではないかもしれない。

【朝日ちさと委員】

- 自然と調和した水と緑、の「調和」も違うと思う。今回やりたいのは動的なイメージ、オリジンあるいは歴史を感じられるまちづくりで、その歴史的な時系列の別の軸を感じられるところが議論されたので、動きを感じられるような、創発や対話、インタラクティブな感じの言葉がいいのではないか。

【野末俊比古委員】

- 浮いている感じはした。クリエイションにどう繋がるか、やはり表現した方がよい。例えば、知を促すとか支えるとか、環境のことを言っていると思うので「知」という言葉を入れると落ち着くか。「誰もが創造・発信」も、知の創造、知の発信だと思う。「知」という言葉にしてあげると、一体的にLibrary for Creation、知を創造する、交流する場だと、よりはっきりわかるのではないか。

- 一番重要なのは循環、クリエーションをぐるっと回っているところ。図書館の場合、結局資料だけ調べて、情報だけ持って帰りますという、インプットの部分だけになってきたと思う。そうではなくて、そのインプットした資料から手に入れたものを、ディスカッションしながら、みんなで新しいものを作って、それをみんなに伝えていく。それはビジネスかもしれないし、学習かもしれないし、地域づくりかもしれないが、次の人たちに新しい知を促していく。この循環を新しい図書館像では全部やる。場所だけではなく、機能として賄うことができる。使い古された言葉だが、単なる情報よりも抽象度の高い「知」という言葉に近いのかと思う。
- 図書館の既存の機能をお伝えして、協議会ということを行ったが、図書館も学校支援や市町村支援、ネットワーク、あるいは MLA 連携って言いますが、ミュージアムやアーカイブ等と連携がある。今までやっているものをさらに文化施設にも広げます、学校も今までは都立しか直接サービスできていないが市町村立にも広げます、とうまく下に散りばめてあげると、表現がしやすいのかと。
- 図書館員のあり方、司書のあり方と言うと、例えば石川県立も学芸員をたくさん雇っている。今までの人が全部やるのではなくて、そこにも周りの人がどんどん加わっていくという形。学び合いだけでもないので、うまく表現ができないが、教育学で、いわゆる学び合いの空間ということかなと思う。
- 図書館の持っているリソースがあり、だからできること、あるいは図書館だからすべきことにやはり中心がある。図書館が今あるものを生かして、それを育てていくところがポイントなので、図書館だからできる、図書館だからすべき、とどこかに入れていただくと、このクリエーションの意味がわかりやすくなるのではないか。
- 指定管理や蔵書の開架と閉架の割合は、丁寧に考えないと怖い。どの自治体に回ってもみんなが見ているポイント。例えばキッチンの隣には料理の本とか、資料も固めないで、その活動に資料を合わせていく分散配置、思い切ったコンセプトも最近出てきている。調査研究には固まっていた方がいいので、難しいところ。

【田中元子委員】

- この図書館が何を指すか、知は何を示すのかがはっきりしてくると、分散配置がいいのか、トラディショナルな配置がいいのか、明確になっていく。ある選択に対して共通認識を持てるという意味でも、一つ一つの抽象的な言葉を因数分解する作業は必要ではないか。この緑に対しても、歴史とか地場の環境を生かすというだけではなく、クリエーションとか集中に関して影響が強いという研究、実験データも出ている。例えば誰一人取り残さないことも押し付けずに、人が多様であることがクリエーションにどう影響するかも研究や実験データがある。情緒ではなく、論理的に話せる環境にあると思うので、その中で

東京はどういう状況だから何を目指すか、話せる内容がたくさんある。

【吉見俊哉座長】

- 「知」を四つの柱全てに入れるのは、恐らく全員賛成だと思う。3番目と4番目の柱に知を入れるとして、いいアイデアはあるか。

【野末俊比古委員】

- 余白っていい言葉だが、それを繋げると、知を促すでしょうか。緑、自然、自然と対話、知もあったほうがいい。例えば、自然と対話し、知を発酵する図書館とか、いろいろ考えられる。

【田中元子委員】

- 誰一人取り残さないとは、いろんな身体の人ということだけでなく、「知？何それ食べられるの？」といういろんな知性の人もいる意味だと私は捉えている。知は良いものだと閉じると、その良さを知らない人に一生伝わらない。知が人生というか、都民をよくするものかは、図書館のことを考えるプロジェクトの中でみんなで話せたらいい。

【吉見俊哉座長】

- 付け加えれば、情報と知の違いは、知は身体性を持っている。知の中には身体という要素が含まれる。だから AI とは違う。そうすると、自然との関係における身体の面もあるし、いろんな意味での身体があるわけで、誰もがという話を4つ目の柱で表現すべきだし、「知」とあえて言うことの意味はこの身体性と知識が一体になったところにある。

【野末俊比古委員】

- 知とはどういうものか、何のためにやるのかは、公共図書館で言うと民主主義の基本。つまり、我々が自由意志で生活し、行動していくための判断材料。そして判断したものを発信していくことで行動する。それが図書館の知。やっぱりすべては知識・情報。
- だから民主主義が成り立つためには、知はどうしても必要。様々な方がいる中で知というもの、情報を中核とした知があることで、全ての人が幸せに暮らしていけるウェルビーイングを支える図書館。

【田中元子委員】

- 公共図書館の考え方、人とかクリエイションとは、この会議の席では共通認識もたくさんある。インクルーシブや緑は抽象になりやすい。偏差値70以上の車椅子の人だけ入れ

て、みんないると言っても仕方がない。やはり東京都は何を目指しているのか、都民に対してどう考えているのかに行きついてしまう。切り離せないなので、言葉を因数分解することが多くの人、住民だけじゃなくて、プロジェクトに携わる方々との共通認識を深めるためにも、必要なことではないか。

【吉見俊哉座長】

- この議論をパワポの図で示すのは難しい。むしろ文章で表現した方が、議論は的確に表現できる気がする。最近 AI は正確に録音をテキストにして要約してくれる。ミッションステートメント的にこういうことを目指しているから、こういうことをするという話になっていくと、いよいよ深まるかと思う。この資料、私たちは理解できるけど、アウトプットしていく際、情報だけ言葉として渡す形にならないように準備が必要。

【中井孝幸委員】

- 市町村立図書館の 80~85% ぐらいが、要するに単独で造れなくて、複合施設。マッシュライブラリーと言って、マッシュポテトのように機能を融合した施設と考えている。図にあるリングの絵を見ると、全然マッシュされてなくて、粒々のまま。だから、この輪の中に、こういう機能がエリアとして入っているという感じが良くて、その大きなエリアが図書館でも良い。石川県立図書館も職員側と建築側でバトルがたくさんあって、あれを使いこなそうと腹をくくってくれた。そういった意味では、うまくマッシュアップし、多機能融合型でできると思うので、もっと広げて、開いてほしい。逆にこの場でもホールや女性活躍支援等、リングのほかの粒の話も出てきてもよかった。

【中島さち子委員】

- 「知」はとても良いが、見た瞬間に引いてしまう人もいる。例えば、自然と対話し、知や身体を開いていく図書館とか、あるいは土地の声や歴史を知り、五感や身体を開くという表現もありかもしれない。「言葉」や「文字」にしきれないものが、今回の図書館にある。自然の項目で少しほっとする人もいるかもしれないので、「あ、そういう方向もあるんだ」という感じが出せたらいい。
- 広がって深まって、ある種磨かれて、生み出すって良いと思うが、個人作業になっているところがある。みんなが会う、何か始まる要素がほしい。個人的にはごちゃ混ぜとか好きで、マッシュというか、そんな様子に変えられないか。

【吉見俊哉座長】

- これだけの議論をしてきたので、この四つの柱の文言、言葉だけに限定して、委員から

ご提案いただいて、今日の議論を踏まえて、最終的にメールでご確認いただくようなやりとりはできるか。特に3番目、4番目に限定して、ご提案をいただくのが良いのではないか。

【中野泰志委員】

- インクルージョンが十分に実現できていないのは、人権問題となっていないからだと思う。知が能力として捉えられると知的障害のある人が排除されているように感じる。「新たな図書館では、すべての人々に知との出会いや学び・・・」もしくは「新たな図書館では、誰もがアクセスでき、人々に知との出会いや学び・・・」としてほしい。また、東京都障害者・障害児施策推進計画に言及されている「読書バリアフリー計画」の推進については必ず言及してほしい。
- 魅力的な提案であればあるほど、障害のある人たち、例えば知的障害のある人たちは、この図書館を利用できるのだろうかと不安を感じる。東京都は、障害者推進計画の中に読書バリアフリー計画を明確に位置づけているので、少なくとも今回の提案にそういった文言を明確に書いておかないと、事業者が選定されるとき、これを軽視される可能性があるかと懸念している。

【事務局】

- 世の中にこの事業を出していく際には、智の創造拠点というまち全体とその軸としての図書館というか、まちの新たな図書館像なり、世界都市東京としての新たな文化施設のような形で出していきたい。今日いただいたご指摘は事業実施方針でも考えないといけないと宿題をいただいたと思っている。まちが切り離されて、置いてきぼりではなく、Library for Creation のコンセプトをもとに、一人一人が自分に合った生き方なり、世界都市東京として世界を切り盛りしていくような人材を投入・育成して、みんなが幸せに生きていける場所にしたいみたいな、東京都としての考えを具現化する、セットで語っていく必要があるし、その前提で準備したい。
- 事業者公募にあたって、ソフトもハードも有機的に繋がることも含めて、建物的にも機能的にも考えていきたい。

【吉見俊哉座長】

- 事務局から大変心強いご発言があった。もしそうなれば我々も積極的に参加したい。
- これまでの議論で大きな方向性は整理がついた。会議は最終回とし、計画の詳細は事務局に委ねたい。